宮ぞの
けい本

寛政五年ノ冬述ノ筆之

あれはのひかる源氏のはすゑかたりける
古物とやのしにはおもしろのとかれは
そのつゞきめいてるこそいとうるはし
いさゝつまをしかれどゆめし さまかは
作しずくのをもの書人よみねおい
かうしまき思うくうるさみのけ
ちきくらうもつけるくへのみ巻のやう
うる作おみ絵よ志のびづくとぞなる
ますよかにようく筆のすさみなうき
とれ作るその人々もさくそ人さん
おうさびらむとうりそめるる様の
東ゆうふあしまくりうすくなりよくれば
あづまうくへはそのり すゑとなふに
よそりや筆うきおつめおふそびろ
ごと形をうらせてさやうれかみます
うせけるつのでまされとこうけすま

山ち心

きてあるべしもなけれども。さてハな
らんと思ひける人みもりなげけるとこ
るかりのせめておかしさよのこりそとき
ろうよやあるんかのたらなうらしうけ（うきき舟り）
みふのもり渡りのうらきてつけあてし（笠ノ）
後はいかなりしことぞはんにて（ききき舟ノ方小乗こし）
らぬ知りすてゐうしきしものから
さばそのちもうびくつかうしき。
されどもかきおそくし給ふかねし志て
てのこうくるまいれど。中しは心地を（遠ん）
ごれなくいしいさし給へかきさつ
らぬおほしつづくるはいと物哀なり。
こ御心にはきとるのめなかず。ふかく（大和ぐり）
おひしめゆえく。打りく思ひがこう
ぬめりしとさうともへしう代ゆへ
後ふひさまくなんと。のどうひなちはく

つましにあへなくさかりゆきてしまひ
しもさ。堂を定くも忘りくにれなく
さあよ。ひとの國よりきえんかくゐなか
ごよろさわしきよ。いとどうおもひよ（江を大和よ）
そうれさすうしうらしうく思はを
給ふぞそれをさえゆらなりくのあら
しかど。いさ定りつ堂しせもろうでも。
あそあやのんやいかのしもなぐくる
志きまで堂ちらんと。銀ふなくし
あやまふきひさつれあふとなく給
うらざ給はおりしきつぱれど。打い
くするにうひとくまうさにあてつる
年月はいふひいさきうくまえて。さ
てあかれつるを。うくまつけてハ。ハ。
家かうくつらも中ちあらせざらんハ。
以とも帰らんおうらあへいだ

かく是ぞ物かたりとおぼすべき
それのは抽りてあくは此くゑり
あふとていとこのよふぞにて
女（ぜに）はれの百よりきのうれだえ
ぞの物ぞよさとむひろのこうちくさ
かどふ海めうしうこあしめてそひ
みしまつり物を海いとめでそうは
ぐしのまよのふすぢすくすのひさく
つきころすそのそぎめすのどらつく
さう人ゝおかるもめわかう
しくは（ば）あちうくあらびつきふ
くさいすまりてきくそひ物それゆふ
うさすどめりよふくしうこも
そゞやつしつんさ海よそぞさて
そひいこれのこんようらあふ秋
おぞうらしとそひしうそふはる

めまえんとおやしられだりよう
あさくいあうぎらしゆゑんのと
りずすんしつかまつそいるぞ
やんをききめぐうそひすりあしが
おやすくこきんう世後しく紛いあの
めまそひきましくおをさすがき海
ぐまつけてふをそふすも皆
よりそひきてにしふれねちけ
がましさまやひとつゆらのこ
まかくさそしあふあぬく中納言
き海しとうむひつひすふれものあ
ろし筵れだし月のそふすまよ
てくにおしくきすらまきあく
もぞおのこ皆ぐらよ哀ふし
あやしんましいろさよおくず
けぎやうすうひとずきじくあて

首を忘れぬかねましにそのつらしかよふ
御かげもなど[illegible]んと。なまじらけなき
にんすくきあさりをざりけなくてけ
しきげにおかふおりくおれどぞしに[illegible]
らすのこ[illegible]にあつふ女人びらまげな
うぬうてしろも。あうくさき[illegible]すり
くり[illegible]すよ。[illegible]あやよ[illegible]や
うきへいまこすだふりてくやまく
をそふてもあかんし。そのまいれ
ふゆこなをころしいよ。いへ[illegible]へ
くるはだ[illegible]ちにもやら[illegible]さら
て。ふうさうくの[illegible]くれども[illegible]さり
さりまつれだ[illegible]さるべき[illegible]にし
そとなだんもいとし[illegible]の
て。[illegible]のそりまつるよ[illegible]のまへ
で。[illegible]うちらかづきていと

ぐうり押しあふこにくれ。ち[illegible]の
けふ[illegible]をつきかれりうしづるなど
ぞまなれけくまりしうこなするよ。
さづりはりくねけんぎしにふねお
かしうるよ。女の[illegible]まいくひ[illegible]す
けんうすくすむさらんとおいなう
[illegible]おひらげられのづくけん[illegible]れ
おいさるらいとめでくき御事なり。
三番の[illegible]もいろよ[illegible]みのんなど。
しらくさくのおまするよ。いとちう
さう。おくよもしろひのあつるゆき[illegible]りう
くおりげみらく。なをとうるかくよや
つしのかづきけ[illegible]らりと。たゞさんか
ぐいふしとのおやめいて。いきうく
涙ぐまれま。[illegible]りじめつるなや
よ。きのこもむすずれあうず。そくは

萩ぬらきりしすゝの風はなそえて
て。夜のうしの虫あかれいのこそ
とう見えしまゝまも。今うして寝覚
るべくもおほえられぬ。旅ゆく袖かり
ましに。風のさと月のをゆうすも。いとゞ
さて衣をひつ。かなしさおいさうて
ぞよね見えがちなるを。まして宮は
さしくあはしのそと。つゆしみぬらん
名麻のねよ。蓬もむすほゝれてなは
すさましに。さえすゞ虫のふりゝお
はるゝ中うも。秋の夕いうで人のみ
くすもとゞ思くらし。おやすもぞ
のうひうう袖をのこあけくれ思ひ
ゆるそぞおのづからくもりめぐらし
たえざらにしも。あとひうなふうによ
いるよそひあひ給ひんと。旅つきやす

うしう見ゆ。うてくそれなれど。
風のつゞきすもこれなくんいて
あさましうなうくべう人にて
のこりなくこそうれすわのねどめて
命婦からのあはれさなれんといは
おうしう。ゆんしかくりけるおほえ
しよ母君は今つてびあはひきま
かうおゆかうし給ひ母さんみら
まくるゆつひすもさし出みえん
こいつてましうて。いとつくやかん
この葉もえんじす。むなかれての
すぐし給はずかはじめありけるなれ
このとそりくあらと。さかしの母君は、
ゆくえさんなど。おやしう見え奉る
し。古郷の恋ゝ。ほとくうすらう
らひあそるを。母君なとおほげ

さらさていとゞ御さらうしらば
かくされふうこのことも兄弟らく
て目ばよおねらうげうちうされば
いのりのきうしうやうとする事らく
てそこうら縫ぬまで行かずりかや
ましたさ留よしとつけあていつく
おもはおけさかでいしかうずの
どやうするひるつゝ銭はうくよな
がめかし御つるみのゆうらみさしかれ
身れつまゝそめしらせてかやまちう
しつかしれ人めきげうむかり
まうてこのり東きりねばいふ
されもぞ今これよりすぐよ
ゆけよば然ごらもうぬしまで
くりさかいつしうにふひかる
むとて御文まうりち海うちやあ
ていそぎうれじゝ有てけて也ろう
うれしさらげくらうある貌まぞ
りつきめるうしこうすい御の涙ぎ
名りうなうくぶあすか顔するに
あすくより人まそて房えにく
あどさうめきゆかれげ芝ひしぬ
かどよりゆおうらしたなて作ゝがつう
ゆし縫へしくしうごさ人すもせ
花ぞあるをまのこいつしいるひかし
ますていうよ物しと然ばすんとぞ
そうかりておさ海しうこるあり
おうぬはつれるきかりやとはじよ
いつもらくしうしと兄らはよ
古御力うるうしにいとせうれお
おゆさもくすのゝのりしつうよ
ついやうりば居ぜんいぞうりまうる言う

うらみたまけれふゆゑこそおもへ
やぶるめしおきしすぎんが
ぐらくらいくてそひゆゑ侍る
すてよからぬれふさもんくさてれかるに
こそまづいきり吾しく悲れば
名をなりこじてし侍るこのあふへお
こひさぐくするゆゑかりあるてんべく
つまからる御じうかんらけあるへ侍る
つらいふ極もいてられらげかり召
我すすめやうるよ申しさてそてまづけ
あげするをひさ母をしかじし給ふ
なをといてつましかれど我心すも
げよかうすぐ御ねあわぢみてか
つぬよかれあるて母ぶんあぢかて
あふの我よかがりつぶれかりと
さひあらんもいてくろし給はさから

らんきれよはのあかしてはやとさふ
おらくわれぞく我すもおしくだ
ぬまつりきしい言にもとそておやの
あさし道じきへくくでくすつり
くられめれどいまらうそてまづ
かくさしてさてこゆゑいしさぞや
くよおうしげするさ母むしかしかれ
菊げ家がりくらあおりふゆく
しなどのありしまもわかをと
ころにゆあらかにそくかりにく
よふとあさぬくらり如来も打忘れ
つる首のてしわれざら又見て出られ
てさつ母ぶんのゆく侍ともの御し
かれどう然出あべきこの義ふも御が
えずこいかれあしひあて安
まうさ誠よからにしをこれなく

さてそのゝちあけよせめてうらうちの
おりよや。ぞひのかゞみのかゞやくでから
ぬかひんちしてこそありくらし
つれなのつらしみちもなづまるにて
て。まづ母君の仰にとかん君来りう
うすわの給ひもやゝあよいなり御言
ちゝて。御りしまさず物のし後い君
御かげきよんをたなびひおやうしく
えんのしど。大わ殿ようさゝ母ぐすぐ
きめ給てまするかずまでもいゝなう
がきせ給はんぞしのうじけなされ
かざきあてかげそゞめくらりとくそ
つねよのかゞめれさまでぞ猶どけて。
まし人ゝすもあらずそひてしなふ。
うらなくなりし御りゆがれ
ゆえある御りしう君へしを大わ殿

さびしたへよりしはかに。姫くのかの
しかいえんゆし給ふかど。御らんず。
びひぬきらぞれかんいと御しき。
ひげても見えければしぞかなをいら
みつてゆきあけがにかうとかうさよ。
あらざりけるうき海すも中のかすて
よその見へど。いかくうしと思う語
くうさくさ母よかくも。母君よいさし一
えびわひきなりんとふられきと
のびくつへてよとて。若君が
よのみさとり出てさしあなれば
みころよひ山いるつる御姫
あそてき。いかよのあかきん。ぐびと
ぐりすくもありてぞう御んゆ
やど。いとゝて年月のわざなへ
うつりなりらりつ。ぞうりうきかな

かゝぬさまよしらのしてくりてかくさく
むしいそのはずやとうしみられてゐる
てもえいとずふしめすり。させて
ずくかにんりしうきにかんぶやうおはせ
おきすくよりそりけさびとつかて
さしもくらむしつますゆゑのやられは
ざよなふくしとすくしつげかるいを
気すり。くろのひいろのしてくろめえん
なぞ。例のさしすぎく人もいとおし
がれば。居だんもげよいりでかよひされ
める人ぐくの気。行かくすかよひゆべき
らんのうけちよ給めるを。こらよひがら
夫婿〇しめへりしていひせりまく
までい小兵衛いそぎ気のべくのおつくり。
いふぞきすりは給ぞく。月のえんにもたて
うどくりしるすずくすんとてきるを。

さもおかすけでとうくしきあつら。
あらけめづさ御見舞うじよゆゑやと
ひとりのどもうどまされたいと
くのりしけるう。病中う介抱する
わざよ気りつたされたばうずさるず
きれふくう。うきひとさしばらきん
とさへどもいつくつりくろけるぞあど。
名ねらまえもむろうしげなしとつくよ
くるどゆかしてくえ。母親にもげなあ
とらうりよつきくんかくどさくらん
てきとが見色いろよせまりしとみひたぶ
らひて。どそうひちくろるまゞくで
の声あるそく。いくぞうあいさ
しげするを。けぞのうんとき病ねも
うく。次郎く見くかうわきみちく
くりくぞ比ちさうのまうりとみえ

てにもとられしをおさまりしとておか
られくわえるるかしみぬよさかぶ
らぬ松犬も今ぞなつけしわざ
つやそぞあけさるる。かどこいさて
まいるとつぼいこまりけるを
むし忘れて。まらにすんでゐる
れ給ひしいらふされどそのひと
しきつとひ要ありなるとのことだ
ミを知る也く。ゆきてやら集り
あつる物さとうてふも。いとおりしと
さり。けふ夜ちらしとさてつけん集り
かふくづのむさし車のそをさげう
さらぎみちくり。火へりえ海からて。
あはしうられども。鐵よわかね
うき風吹さそひて。けふ夜をさとど
これを。そのくめづらうするてや　のめて

うくへとまりでおのどすゞしうり
つれども。狩のくりえとまりて。常
さづまりてみかまりでちりかどて
ゑどりのてさめやうするよ。さえを
あけり乗のおりしれよ。わき夜よ
さらせくく絵ふとてかのまられ
おふのもつてり。あちいふくるすでこ
そ絵しかいつ狩よ抽しつるぞと
ののへば。まつるまさもれ小集りつる
とやめ。かれのそ倒乃おのじぶ
ききのんとさふとぞろいふけれと
ののふみまよ。さりもおかあさ母る
ゆしすてよとて。緑にうしと
さいまうつるへのゆ細かげ。叙よん
ぐちう常かれて。さげはさめり
ワかれさ。つねようくれなりんりの

ゆくてとたびくいおしりりかえとぞ。
まつるまてまうしにゆめ見（ぞん）かゞぞ
どあしうよこそあしてかれど猶
うつといさひまらぬよ。げよとさて
猶もいすゝんのづうのあさまきさう
覚す。（かえん）わらねさあまきくすりかあるけ
まだそのへともなく御げらりして
としもへば（ぞんじ）うまよしげりやめの
ともひあつるよくば（御なん）おりしかづう
おごいふまに涙のおつるをとゞむべくに
さくらづくるを、いまば（ぞん）見よこ給
（ね）させそのつくへよしあらん文にと
のみへいは（小文）むくら。あとすひのうこ
いとさやうは、とゞしまさくらう
より。おや（ぞん）しう御気くましって
御の心ゆりしそれば、あけてと給とそ。
ようくねく氏おもむやうにもあるまか。
秋かどかどうくへしえんとれ
ゑくおくゞまうしかゞしのまか
まだ。筆のもりがくもすまひかる
（徐）わたさうしこくすこつれがるを
いとひつまてし気みさゝやすで
（徐）うてび御かうさ世ずそめる
ますよいろとし氏やまをそかりも
博しの花いいまそられしきこあ
るををふまい（ん）くしうるのし（池）とむ
うりなあらひあつるゆ結の雫とろ
をにまそかくんつるしと旧り里ぞ
むりにいなのしかうさきまて。
御をふくあられと名あつゆ（ゆき）気氏
いくじうかよめしくあんかま。
ゑの（ぞん）かもいとめてこしと打給り

やしつゞかりえしきあるにほひ
すきさ書よすり給つるを初しおさ
らしとえりかをとえぐしと子やう
きんあるいはまうふあゆすんぞつる
へきすづさとのさいえも給ういと
ろくしさやうありともこゝろひ
無びそおきんとえてふをその心まう
けして夕つかく暮れとの更ぞい乙
こよおばさんとくろしるれどさて
えゆしさせすうけぬらりて出ぬ
くれめまでぞいゝじう無ひやう
しくる女車のきぬすておかすぐ
しらえはすりてぞ隨身いの
つまうりめくる夕霧さらとめて
みちいとうとくしくれ大ふかさ
くをたるべすくいゝぞれいくりめ家

うちおやきていまいそのうひわか海
ざきそととおばせだあるし世の意
ぐうりやそぐるよかくりあらせまい出
めされいそぐうて出うちにかんう
きくもつてふすものにのしよ拝
おらがうすゝのぼりてる嵐
御ゆめくえひゆるく然ちするよ
いそえしのてすとわしじり
らふくするまよたいときげ参
かけまはたゆぞいびんいてやれ
これどさすがよつまづくさていは
ささの家のまさまも物しく
ことゆうにこえたらのみとよいとさ
やうする承りるりすづろみりいは
をいまくおさいことくだきまの
門うつくさうして帰るめりけ

のうきはさうさうしく家にかへりた
のたまへり。くらしてせめて人々げを
しのびずもやあれど。さうしをとか
くそとものかく。我らり又かふさ
さんとらふ御かうかくしかしさうも御子
じこかれど。いとかなしくはある
さ海なり。つまどもおさそひものく
人のきこゆるまやとなゆれかはさげ
つかるもんざいのりきらうてい
よりて。物をききとききうみの木
そくらうくらかに我かくれ
てきまへだるゝい行乃心ぎ申し
みやうかうれかいともふくらり
出くくこのりつうるよどとかうこ之
あるまや。経乃またきくへさるやとも。
西びやうなたつうしゆへえて。とあ
じめとりの衣かつけにかくやが
ては涙すゝむちさしてつくゞや
みぬあきつるにどうりありてぞなら
ひくてめくるまや。（源氏）いとしの月みえ
やとひくらうちてすごれの月のつます
うしあけて月のかほをつくゞと
あづめくるかくりしめ着がゞの御
うげかく衣し出られていとじら衣
なかまへあへ。ば月いのきりあくきし
入くるふあびまうぞめかぞまや雑
ばすつしうんしてびくいかゞみの
ゆかくとそらのかけ小するすみの
わくらいきさうあさめくしう物け
まくかるしもくそへいうそけさま
さりて西びかうまりおあへるよ。
なとどかりすかめへく

さしもしらぬやまの井の月のかけのをや
くしよの秋はかうかうざうさんとあそび
やうよひとりぐちて涙ぐみける母。
いまじう気るゝは。まめ人もさ此を
いえさづめなりけずやもちろん
みる此月を涙ながらくれて
そのよぎうのかげをこゝろあまりて
めとより縁つるに。いとさんしおぼけ
袖のどいかん袖はそでともしつげ
もてお（く）ぞ母はひさ入の小袖をひき
なましにをさとめぐさきゆくれを。
さすがそれとゝきもかの小袖にと
りづうしは御しくさんしつかさ
すゝむつけぬ袖のいづいはせん。
世はある袖ともきられすらめるを
しぞぬさきこと。世ひつゞりぞ

あいざりひとゝあそされすまんと
とゝ母かうざまにあしまされつるを
のがれかくゝあるいされずらめると。
をんかくるゝて涙のこなかれ出て
秋のもあかぬさ母いと無慙さも
つゝきもいづつをりじめあからて
まん。泪ぐあへなくそのつらんの
御そぞくいかべきかくなからしを。
縫つくほまあ中ことさ流まきへき
くことぬしよ。いとゞんかなれま
そりてさざめなきさ世のしかりよ。
世すしを。つかさのなげきぞかりぞ
あしよの母か此雲ともなげめしん。
よそふるくのなぐりもみしに合
一さやのせきへぐさしよなかゝふすもし
きんちなんをしを。文暮此やうな涌

しもをまねく人はありし信成ぞ
きるしあらんと。さはかうざ身よ。
ゑいよりゆめよ海どいつ。あつするが
つまきかんやとの。たかげきすじ
つるみうちを。うくしもいつでおば
し。ちうざんそひうねあくがれ出る
らたの宿げさを。仏師もあられぬの
ゑるまや。そ此神まりかりもすゝめる
そうひめき気のなりしくかるも。今
きかられしほどすべて。まゝをそべく
もあつきのおつづくるよ。さすが気と
きこまつしもあれど。いひ出んかすく
でこうちかさあつまる風。おやとよ
らうさげかりさりやいとうくおやじ
すまくるまへつくさ。着しうふさら
まし身なれども。やさいのきぬかう

さも人そあしぐらん。又と。我のこゝろ
ちうてゐぞさうるうしみせそふすや
あんよのかまよぐうら川すぢめてと
まうしくすめ繕宿を。ますぐがくしう
そうつしくそいどいやべきてと此ん
も気ゝねども。あまり物げつなる
も。ほやしうりめべかれむ
付
なかしへてあつすもあしぬきて
さんぐそのまゝ此家よなしてよ。
けのうなまびらしうるも。むしるよ
うつずまうし。翁そひさうる君
しもや。あかりしよりもをてきし
ようい此ふうてねびまさりのゝる也ち
さゝ。着の大人よも形なうそゝかる
るとゝあつまいとゞまさ成うち
まりし。色あしうきのまゝひとた

くわしきをうつして侍も。さあそれは名に
たれんとこそおるけじられとて
（三重）さひおつくさふざるよそおのかれ
ますやうらりし暮よすすべし。げ（ばれ）
よいとんふりて楚しへきぐそのご
ひまざらりしまつるゆきまいずらし
おゑひしんくをおかれをすずす
やういおしじらじ。この（三重）ゆんりくむりは
うらぬすつうしきの悪ひかくう衣
うらすまも。（語）我かさざんくをいかう
しも給ひのいさめきもいづうじじ
ゑ。おぼしつくれど。（三重）うちへざにいらぬ
ひずさ海よくよらぬかて。つれなぬ
ことも知つうしうくいかつるを
うつゆき母すんつくえめべさかどら
今てくびからぬ。ゆまそおいくんま

おかさりけるを。すがをささうご
うのえ。（語）くろしよのこきおふくだ
ならむしひよ若の花。おしよ露の
ねしづきそへるほど。すくきこ
つてされて袖かそしほよあかむる
女郎花むしろ。露のこまやうこ
だもう。すみれ月見秋をとうまへ
ぐほする虫のくゑかど。そりおつめ露を
ほくしるまのさ母すうるよ。さみれつを
のすれするゆみりおいくすも。おほ
く露もそくめべきを。けさすへぞ
暮にぐよさくうのいこうくらし
御もげを。くそれかぐくわいむらひ
ゑつる露をいくぐ名のめすんまさ
うるくあしおじらじ。とてくす
をしのごひきつるげ秋の句ひけ暮の

あのよもおぼしめすらんかさ月光
に・かうらしくらしつゝのみか・ゆめまでもし
くるしかるふ・めもさえていひてさら婚
くれど・ちるゝそうつらし・心なく
うらいおうらさらそあれ・なまじ
ぶらりにくらうまぜかどりしな
いあさ・人よをてとゞまぐらん・世てう
まろ・すゝし夜もまくらくんうし・
術の文めいてるさしすぎ・人丹い婚・
ぶみのうちとけらりつゆきゆを・
つかよ人をさしあん・うらゝゆと
ども・にやつゐおてしてそ・今文
はかりくれなどいひてそなみと
とりのけらしわそめてのぞたけ
まゐ・つさしどのさすひきあておわす
めら・きしぬるのす・じいらりのるな

ことかと・いゝじうえんすゞ世を家らふ・
いまやうの人そかくしもあるぬ
ゆめ・常りふきはくしたそうど・
めでまじふもんづきかし・吹すぐる
他をひ風がざい・ましてそて紫
おのんちらそすれ・経のといまる
をんぶんのくわりも・今そ常られ
あどらもそのく・あもすゞらかう
しのりしふ恵びらずゝつ・いまご
そのまいにくそおうすづあれ・お
さましきにかめのふらさおりやど・
くちぐさゝめても・ぞりゝぬ常り
ぶすりし・やうし脱ぐくちきか
すれど・ちあさんとて・はそ心ゆる
おぼしむすがれそぞ・うさ夢の
さゞるやすやぐもるとられさげ・

有らりくるくるまにすことにし哀れ
むかしをもあはれそひて、さぬてする
むつびすても、ねばつらかりぬれぬよ
やむしけりきに、かたり出たされつら
めぐみよりつろみせやしんむりしの
山里は草のおもはせし空より露に
そしとらうし情をはよの名をさく
うちてこそ、ありしよりけよあつ
しきてかしがさても此暁のうけがう
つらんばくしうるとに、すぐ出てよきち
まぎりつる、東ふくき宿よき立ちまん
上 そでよ。いくぼおかりしらけんとて
そひやれ山城の露よそがちなそて
みよけるるあの月の袖とられ立
いる衣さても宿をさりおしんや
詞 宿ふたきらかどをさけめ人がには

秋そすこしひの袖ぞさそりて。さらね 上詞
あさいろうすものあまてうか すなめやう
いはれしさぎん、情をすて、今それば
つらかりすとりてすしすかふかして
あらんかでもでのあそてりしまらう
ぬれぞよいそぞ出かいうてやつし
ふるうりのはよそひも、いくぶうまま
めしくおりしけりて、宿けきくさ
むかそまけ出の情さまにさすぶ衣を
三おらんりし。つとあてきへで紅の
情あへのうちとけぎ母いろありらんと。
くる文体ぐりて、よりぬまつりしあ
うつりぞをめでさりぞつ、雅された
一筋かつま。わくぬ句ひにそて立を
ゆりよ多れあぶうそてをりくせく
いひあつても、うまふくけまでにやこの

くどきなきいひつゞけ。かすかなる
しにめでゆかるゆゑ哀なれども。まし
てなるげりのしもおさむとの中ね
その心ざしのひとりを思ふる心だ
なれ。おじろく さてめでゆるし給る也。
しとりなるくもさうし。（浮）ひあがい
なるともつまにいさんもちいふぜ
きやうにのゝゆるざるつてぬるる
よ。いろしう（芝）御文の御（浮）身の身なる
こゝか○そだ。さらいというしきさに
さるかるとて。いさゝらいとせのえん
あいすゞみかくすゝかいなる
（芝）たちくらみかくそでぞかうさ
夜の暮をうつるさ御しらる○て。
（文箱）はぎさをいとゞみえられ給はり給る。
うずまつせんうさなもん。今は

梅の義をとしにおげしさるべき時哉
よ。行つきをあはれかへそ。中へん
ござよらんず○と（浮）うちつけよ涙に
くんく行いとつまひらて。恥しも
うけあと。あさ泣いとそでよおさへ
しるなん。かづらりまあやうするさ御よ
ゆゑあめのなくりてすなぎしさき
やうにも恥しあん御ざいてくしらり
をいひさらをられて（詞）うちあきつゞば
ゆふべのかくりける
（浮）そのまゝに文箱との身にそへて。
暮からつらゆれざるやすいさと
うひならさてなり（芝）つまちきあふ
かなれ。義なのゝおげしつゞき命
かりなされば とて。打つけるよ文
めさるゝうみのらゝうしこうもいるよ

ぞやこのさまはたゞひきん。又たと
ひえんするにはやまみすのぞきかん
も。いさゝめはつぬかくまきかんを。實は
とすまさまはうそきまずざうしる
わらやうのつまぐのんがせら。肖も
けしういあらず。只しをすゞ招引し
みなこの後をあらし文をつかはす
とぞよろこびまさるぞしてさいがん
わぐ人もあまきなきかんと思ふそ
くるしみれとのあふのおもとい
しいぞうかども類ありたさいかば
に參りてかれぞおもとをかげさかれて。
あやしき。あはりくゐへてきけのせきそ
まて欲を笑ひしつゝんざ母かども物を
くちくれらしものそゝと見ひ
みればあびて參るべくのまかせて。
きぬなどつらしられば。ゆくぢなきろ
びく參りたるを。あいておりさ母。
ゆるらずらひられさへづるま
らぬかゝねど兎も角もやすし答
しかゝの夕がりのおもとはからり
とくまゝのあしいさしけくゞるゝ心
りさげたりしを見いてかやれに
てみてめさ母してさやうみたるも
つきなうゞずぞあめるそれなもけ
蔭氏やうすることをば。くしれども
こせあはいざりけるを。人きげうね
わぐかれば。いとぞめしきのまし。ま
みすゝねどのおもてゆるきさく人の
くちかすゝいさきん。さあきれ
さうさ母いとこいりあり錢も物
いかありしこともいえがく昔が

ゆるりとめそゝくひゝすゝおゝまし
きみのあるよのこゝろちしとあや
しらゝし母ゝすゝうつけやしくりける
人はうぢよりしねらこ母やゝみなの
さだぎかん後もうちくゝて
ひうしくすやゝかけつかどいぢれば
筆へるあそさもみなさんとこゝを
みれ母（ほノ）だのりくへのせうそこよ錢
こ母をいとひまけりばこれ御なかす寺
らふるさ油ゐゝ田までいかなりける
てとようしとんえぐゝさ頼その沙の
まゝ頼ゝけん人そいかゝもこやれ
するうこゝきべなれよのあくば（大宮）ひとじめ
よりゆゝさせしやゝにくゞあさ夕
ねざのゝかき綴くいゝじう勧とお
ぼしうぐ母くもあさぬまでい後め

母のつゝころゝぬづゑぞとりまひとし
めていかさ母すしてうあとうまなく
こかき入母おりく侍しおとゝらう
あくこゝすしゆえなくし後はぐあき
ぐひあくれ乃そらこゝに入あてぐり
せうそくさまでもさひゆし侍りつれ
りのくらんしゆるようきつけあつりし
ことかどもいはしそと母と勧げあれに
くろしうかん久し侍しといさりける
ほとふかりしひとくいゝじうあく（ほノ母と云し）
ほくゝ山はいゝよえひまどりんおま（三宮付）
つゝん勧ゝめぐかん頼にて勧さらが
しゅうん此母（小君）いひとおほかりぬさ母
きこれど母をりろ大のもゆきゝく
このやうりくいひちゝすまうば
くちぐゝめてぞよるべきひとゝさ

いまとふごよ世よわかてゝいかくれ
なげすがたおまくへりおもんかたなど（白）
きゝつけなでことゝもいでさかれ哉ま
ひとごとくめもよしなりがたにてと
そのなかや（大を）こく車にのせ参らせて
いそぎのりて出れどいかゞすらし
ゆりすぐる程よそしとゞめて（詞）御ふりて（小歌）
くなんとやましあへといってへてさ
なんこゝろよ（浮舟詞）かなくとこしゝさくへめい
てあなひしめでこなたへといふ
うち（大を）とけるうちへ入ぬ御のうてな
のめらうしいとゞ恋しかりぬ
なちしてかく（ひいち）もこゝになるゝ程なり
かくり三（浮舟詞）ケけぬれとはいひかはして
りしるにうこゝよびなき（ひいつ）あけり
御まくらあまりのなが月の夜に

かく此ゆかりとぞしりしかば御まへまゐらせん
ぞとえぎよつけさせも御かせまし
かゝるうきよのどうふかくそえ
ゆすましとともふよつきせずかな
しれとてうちるけぞかく（ひいち）も此夜
のかくことのよろづよかしげな
きみ此ほどにてすごさゞろゆめをと
ぞよろびおもふかれど
ゆしきえんにつけても夫それよお
あひつまれてまかりすぎ候ぶん
ぞみのそのさきゆよけり　あく
これはこゝめ（大）玉此ゆりよとめて
の此なうけさせなふとこなれば
うづらその此ひうりよおくなし
とやおゆかしとうこけなく候
ましておかせまし　ありつとは

おしくまんそひまて〳〵たのみがに
つかうまつり給つるはつがひ〇までもき
しんともおぼしずいきそやん
ごらんけれども。いちしてころ
めり。浄母乳々のくいでたるはげ
まかども。おりぶてさてなべしおり。
つるゝども。さうくもりうくれなどして
すこしたあやうるまうりめるよちらく
ぬよりて乳母くゆしさすべきに給ひ
てまいりめるとはふは。いづりの人に
ゆくさぎ給へど。さづうるは抽さいぎ
をいさめゆしきまんとそおん乳母
ぬるはこのんを。ぱこゑそゆえ
おいめとは。へど。いつやあこのふ
らんこといたるくしうじといれ
くら給りくなるてど。こかりしと女房

くしきはく。ゆ文こゆゑなれば
おゆしとていそぎおけされども。
うつゝよ人のおひよくべきたゝよ
あしねぞさびしんてえずまかり
ぬきうはくうしめ筝の緒つきまて
もりまのよ。さすがそれとなしめろ
んちゆ。すかさとつむ。こいら
なるとはとこされふしめれば。ぶ
つるとうすしくて。うく御かりしま
ぞうん納よ。人てあまくきてはあ
しうりまん。さりげなくやさゞめ
給へど。ゆえきすべくのあらせつれ
ぞうくさうり侍りつるどさぬく
うしらへられて。ぞうりんまじいと
さゞめておさきあがつて。ぞてもこれ
をゆめるなふぞしとあきれまじくは

さ母。いかにとかうありり。ゞめよりの（守た）
こと、なさなれども、いふかひなき
ずらうりあせん。いゞしうかりくて（浮ノ母）
きゝつゞひてもさくねくあさく（羽）
おにそおちすあれ。今いふそうく
はのまとりもすゞさず。こともんを。
りきあかれおもとうり也。（左近羽）されども
わき稲のも仰しきすり。いづくとお
くてみかうにとろひつくれさをゆるが。
（ひくら）うえとさくめて神ねゆゑあり
ずんなふおす其しのゞめて例
のちうをまうでおどつくりあし
あておもてゞりよおりし。（浮母）はなきお
むたようくべきとやてゞはすおらう
ずおうすゞさおづう。今いそのあど
のかりしとうきをそ。いくずかうん

そく涧のこゝかり御つかさ海いへ御し
げうり。ふりくぬおまごてゞちいは
かすゝねゝかしこきれど。いるよ
しくろはすらくいひのかんゞ
いうとおきいやめそあれぞ。（左近）大納言
のおかりしうさ海の御称おどよいとゞ
そくとりみしものごむおあよ。おちう
しくもき。しうらんぞ。さういはし
この侍ともにうすらずすてらいはまし
きやんどくらうさせおおがいてとうん
いおりうるべきと。（浮母）ゞくおかりそれ
てまうめれどいひくうずさむべき
とまぶしにすまとまたよ。はるとのこ
まうりて。（浮ノ母羽）稲其しうんさ海くに
ちくうされ。（左近）大納言ぞいうゞ御げし
うらしとへぞ。（中将羽）まうかうの看護おさよ

よのおとこにうけまでござまして
さぶらふ地色しらすんずることなう
ぎらつる詞もひとさかすずいぶんぞう
きいおしてそめもあやまりしが。
此まへのかしらびあふすいからに
まかりて出ゆめかたびかたきかれんよ
御ろもいくにつゞさて浮毋くともすぐるよ
うちとまれすがし。それにつけても
くひかさき母よすりあるくるを。
むかいくに詞しと色。させぐ
しめのともおげさまらつずやま
ひづきて。色す　きのばらおく
なりのしとども。とばすがしくまし
うでゝ。格さ出づ。もとぞうへまき
に。御形まうでのよし。くずよや色ひさ
きゝもてよひうりとこんとがまゑ

そておつ月をまつよとこめていそ
ぎせる。うしこまつて色。例のちかひの
こちらいとこうへうくゝゆめれど。
んきいぶぶもちんうつなくてまづうち
すられ候。あさしなさひじしさきりん
じやうまて。さらべらぬとうくひきろう
くろひすぐしてへまつりめだにも
うひかさきつまぞめあれど。おさやう
するげぞそよなまりへさすいとうそ
こさうさは秋のなくらんずまして
今いろよこつけやしまてん人のはん
のうちきそひ色くそいゝだかれて。
う秋まよあふ。げよいくびりとやふ
よつしらまつて。色む中りあかわを。
おまりんぶつきおさやうすや。今しお
まんとをいうれバ。中のまうじ

ぐちよ。まて〳〵いざり出たり。
母はうちよりたびまじいして。
御もおぼえのいちずにむさくるしがり
なりゆくのちの月もでらねど。
えしみもあまたのむかへてさし。
たよげなるふしむすらん人の
面かげすがりまでめぐりあひしその子に。
（浄）めいどのさかひちかづきし我子の御ん色
と。つきへばましく見へしきこれく。
いとげうなさにいのちもかはりまて
忍ひゆくつらさし。さい母のゆくへ
わかばさるするよめもられて。こく
まてそらつは涙よおぼされぬなり。
いとゞつへなりめれど。くいはれ
出あるよのたくもなし。母は泣ら
さらめさひて。（浄母詞）今まであてうくある

すもあらぬさまよみがへるも。なかくの御ことは
わがきまてあん。その中にいまうえ
るまし。くふふるてふ。いそでおはん。
それぞいふそで風のつゝむもうくそ
わとおぼめしあいざらはうとしれ
つらうなし。ねよ今さらよからぬ
浮すぐくこゝをすくしたなくさみうん。
うらひなきのむまよるめおあはされば。
いとゞちもまじいらうとしい
つげく。かしまるひあつかうり
よそき所もちかく（浄）涙よのこともせ
びていへはあらず。（糸母詞）りじめゆらの
こゝ。まさ母くらしく是ら肉かき
と中しられど。（丹波詞）今はいまのいとそろう
らぬうじめならそこそ。かうじの
乃ぎんらいあんしあつり。（浄母）まあれば人まず

うちすてゝ。さらくもいかにして
ゆんじつげさせ給ふまでかはらぬ色
さまのふしおちあふぐるを。
うそりとめさを給ふ御なさけは。
げにつくさず。やしきせんかたなく
そのへらうかど。いつとゞりめぐりみ
ことはかなしね。ちうらみかくや
月までもうちうつろしく。給ひにも
うしめいつばらしうば。ならとうひおは
ぶさきあめりのゆへ。めみでまへすらなげ
なをやくらんと。おのへなげきて。さは
ぐねど宮もしきうりやうく
入まする。弘徽殿の御なさしところ
らびあつ。いくれのつまし。おがみ
に。ことならおわらひなどふ。いつよいう
まりける御もり来すらさふゝは。
かのよもんて給はず。御はらく紫し
つぎてらうまらそれどゆかりにも。
くうしよおばしさめれば。さめてわ
とひそてまうろし給ふて。うぢうり
絶そでこそ御なみなれば。そうへすてい
御しかのど。とぞうりしそあく
しもよろく。弘徽殿宮しきせあめれば。
うひすさ御ちなも。つきとぞ思ひあへ
あげきとくづらおしのあおいはきうれ
おきさて。御すでしらぐひすろ人あまさ
給れど。られいさなしく。御さすかり
こ御づろ人おて。朝子をいうぞ人
あまくすもこゝおしてかおと思
給しうひすて。おすそてうしとぞかま
そのめずすりおしうばいうでうい
きもめのまへすろこそ。宮のつるみ

かゝひかへ給ふ。おやつらさよとせきく
て。なげき給しんの内。くどきし
かゝる世道へ。さかりのんがしきとも
めぐはよ。おもふじ。さすが思すじの
くちかん。げよおやのさくこうしずる
きさころにてこそ給れど。つらうらめ
しくさひ給ふくいろすきまかひて
まことよいてしひすくあふてさうら
されど。おもうしくはうちいれさかあし
ましうぐ。かねしくさんされどもぞ
こすぢよあきらへとのさ給しを。
うくてさのやうる二ころびしみ平
める性まよろび。いかうらとおぐさみ
給るおどかうきくてさきぬへだげる
いろどうりうと。なだめてうさきあて。
（なにと）あらくのんちさらやえて後ぞ。明

くれ姫ぞうさんさしむすびかれて。され
まあくなやこりうりあつきあく
のあやしくてはうゞのすぢを
わのめししあしうばゝこじうみゐ
さきことに御しこゆへてすぐ
給しと。さつうべきことや御しあひ
くんかんなりそめしさうもあれば。
はいかゞはもてしまうたちをにてひ
さら給しつかゞよ弟つゝも悲び
て。そのうしゆかしくどもよのう
げよおげしさりしかば。しろめく
かぐらそゞめをきさゆへべ。ますで
ちづるおりしも。りうあなりしあに
ぐしの時ざり。らうあわりけるにあく
のあはいをくれど。なうしとひあわすひ
わき母しうさすくあさ人はなぎく

〽まりけるかん。地ぐくこゝまゝりしあへ
うまいさゝよんちてもおかじいせんさく
なく保しよ御してさゝそいとうる
しゝきうりやみかの御ねや
えみ人もいゝじうあさうゝぬい
おめりとる保うゝてをこみ
御の手招かくらおしくるそなど
くるひろし保ふうんさの里
にぞくさしよりつゝさてもいかなり
しこまらかじやあれば親なかゞら
うつとも笑しずいゝじくうら
けるとてぶうすまうちあさのる
さしまいりと戀すりもさすぶ
するまかくさんぶようるさ母よめ
ぬれがこのまくりやぐ和ためるを。
ましてぞおさなきちゝの人ぞ

さく。おかなよんぶつしなくさまへさへ
て、さつりこらゝらしいぐて
のみじうくそぶれされど。ゐへもすぎ
て、いうともなくうさゝりゝると。
すうのそぞめみせ中。くいとめでさ
おすまも。みかさくし。きわかどく
いぬあのよんみんなすらし常。かくぞ
うりさ母。ぐうし母さゆんづひ
おりしかんとい思すぶにやしのえ
やりそし。さも御まして悲すぶさ
をあしゆんみぶうんもおきゝく
よりくすくのゝやゝさをて。いふな
ろふみもとそれなしじとおめ
くらなくくさゝぶにくすわかいきれ
まいぶらしつさかぶやくく。
つきをすのきぬすら。のえめせて

もろこしにては。いにしへ人あまくだりし
こゝまでおぼしめしけくめりしよ。
猶それざ給ふ比すきごと長恩え
すふきへて気ま給れ。の面みたと
しらずのぞみよ。めるこそやけしん之
すじもひもすそまかく気ま契ぐ
しんぶうらんねとあまでずぬうず
まへあふもそのいゆらりと契りし
めるこそ。うしけなくこまり給のど。
やうするおりなく。ちりくめしよせて
つきをぬ比てよのこのすむて。おうを
し世のえ。おぼつうすらるめにそえ
おだしくめども。へたうんなかや
あるいうとてもんのいうえおなりと
きれど。たりくゆまじきくるみく
せんぞうのあくあきれうくるはみさん。
人あまねくしけるか。今それとかなし
やされけるとこそんつゞへゆめるすれん
しもあらはさりとも気といおぼ
しかんうしぬど。うくいせなおりく
作るすもけるよこそ気よく人むすり
給めれなど。うりゆかれしが。気すて
そづうしもさまくうれくうぐ芸
つげう。しらみいうとさきさえ
とゝをぬみかをあやしや。めのまへに
気よなうされなりて。すらしも
すひきくんかろきのこゝいざらん
うくなくうりけるうやそてもけ
世ひとつのむくひなし。人をいなに
うらしとゆのゝん身みあいくそて
さすらふべきならずてこそさるみ
ずれをあわりけめとぞすいさぐのかれ

かゝる男のうきぞ。女のむくひな
くちおしくおもはれけるさても
ひとすじ女なるさゆへおもひそへ
みゐの人にあおむけて。又給
かりその女のこ絹さめかはらな
がりかどのならしてめつるには
紗のもいくぢおもひさらんかうかる
かぎりいさすがかくされけりもやりく
おひろまを今つてとゞしゆへゞすて
んぐうしうおもをかしめのともさは
らうすさなるらん名のゆへゞ。給
にうおしくぞおもふくるまつらうと
もおもひいとまりぬれいざんかいさ
よりゆへつあるひとりごやう御のこや
こうはあるわぬくゞ御かど。おわりし
きさ風はそりかして。るへき

給りうちもすじろますず。つれをぬ
ものゝらよすゞきおもてなるのうず
あけぬれどうらうんとうくみなあら
ずふおふたの顔くろけさもおろゞ
よは給ど。おほつかうくめ赤へいぞで
まうし給ひんむうしうみゆゞらく
ろへおりし。おやまのやぞくいおもひ
おやまおきとひろく給れいざら
めゞれさ南につくろうをかして
しうのりんとおひ給ひ。ち物愛の
いふじう身分への主へいざそれも
わりとぞくうれさづるもざとらし人
のまうさゝ思くうえけっとおもふる
かど。なくしや白おつものめと
やまれさてかすらしくうちうすき
まて。いおもさいけるぢ中道くれ

ぞもうるさゆしうる人だ。ひざ〳〵と
ごにくめづきらのおつをさけ出
て。人め三げきすすひそうくて
あんとらひすにらしてうち
そむき。あつうくいめぐいひきう
ずおりしげするを。いしぜきくうおし
と三ごり。（羽）なく〳〵もおよりきの〳〵人
めさけう御んごとけら出にけて
つくし世給べきおど。けんのつき母
よゆくしおすも家をうき。母ぐ
するきぬあやおどしもせらけ。
とりもく。（浮）妙ぞのゆまうりいさう
にもいさす。おさし名ゞすも下知さ
すぐくなりられだ。又するき弟は
ようくひさいぜて。おさびしれ
たぞどもおど。めさめるるんち
おんしげるうらんもゆがん立さ
らさわしくぞひられだ。くぐらり心
おそさすあぬるよくこまりてい
いつふぞてすゞさん。いておつます
きこしのおひく
（浮）おもぬ母てぞひおしつる出がお
くよおにゐきて袖めをすまんで。出ぬへい
うちつるなどりごにうくる
しきにおうき別と袖もいはすかれ。
とゆえく。いさじうぞりみちます
ゞつるそのゆくらの山さへ分
うれとめうおらまくに。いとゞんおそ
くそ。うしこのた又すぐらお色
くてあめのふすぶうらしよ。
あんぞ御乃うやみをおひは心入
すべし。うらんさそのくれは霞へ

さりとれど例よりも人ずくなに
しめやかなり。つねにハ大勢
ちさきらく。ふえかきすきにて
おりします新造（客）ぐるみちとゝ
のひとは神いふけるひとを（送り）こさせてつけ
給へとかりやめし出をく。いるに客を
とひ出て。ぢゞ（戸を）よりつるを客あさうます
ゆくすゑ。かのきにゐのさきて
よのなつる。にすさみもうらやみ
まそ。げ（出来る）さぞそんと気すて。
うち個くまれお。ゆくかりね
客ありべ。かぶらも見て（ずや）あ
らん。今ゑいとあられなんぐうき
くそそひて。はんなうしねおりうお
りかり。客（自ん）もうちくよおりでも
に。さびがすう人もまづくかおもふ。

見しむるところね哉ぞわすれ
がりかけとなりけてもおしらん。（み）人見ぐう
あられすし。かの客（或ハてる客よ嬉）よも新造く
くさひとりまて例の見かしいたや
りよおがしうりし。うお今いさし
もあひよやいあいの作肩をとくまを
つきをず気あるところの見られバ。
女人もんふくて見べし。大新造（客）の作
んさうひもかをとゝいけおのて肩に
うらりあらめを。（中ん）かゞくおがり
さるまろり。りつ客めおよすけお
まるよ。わがしくて見ておりします
と。おまくちんざるの新すべて（おれ）
見やしめづてもおりしまさわきて。新
かれどゆうかうろくごくいかさ。
いうじう見しされバり来るのも

さげすみ。ゆふべとちぎりしいみえるとも。ゆ
うしろ世まで。親の家の御神もち
まうしうて。さらしをなりかね
すべしまへや大和えいたり
すり絵く。内大臣けあつれに
ひらりそむるもちすうゑ色は
ひとり。家例すゞすやましとし
ましと。ゆめのとうちみだこゞまり
ちうすありて押とこえにくゝ雲
えられど。きうじうりつるにすこ
しいうまつと気うりんとゆ之
おどりくさしすもいそぐ。ぜんしろ
びくにいのりどもおにゝ今より
ちらくしとのゑいそづつをぬき
ゞあみゝ。身をはゞをよくわかやく
ゞをゆきあへれからる重いぎまゝく
いざきてかきされ。若ぬがこくはみ
からそひつゞくかねみちも
そゞみのかよひぢをあかいで
こるかぐれ。うしのねすぐゝるぞ宮
のうつれからいとかすかなれ
きびくをと重やさらそと見えこ
しらべのすゝやくすゝむとんぜ
さもいそんかくなし
すむ人のやとぞかうづし宮比ち
にくふりそゝぬそのすゝが命
例のかきくしつゝらも殺
かるらをいとつきぬる命の
あさくゆゑてこゝよ。けらすく
まけらぬつひのくろみぞとや
でしくて。くりつくは出て
ゑる。都まゞまさへくてすぐみゑし

かよ。いかさまことわりやのしてたん
いさくらかがめもふんかきくし
思ふるかみせをのさらへげよふり
ちへ玉つる物なふつも義よよひふう
うれ。ずすさうしんぞうめて
とふにぞそわらをかいまつれ印書の
うらづことら果このうはひぢらく
ぞひくかまのすみといとが命を含すぐく
ぐゆれく。折ぞさがらくこぬのあつり。
さてもられをいろはしくあるさばし
ふづらのことくひあかし。思ひあく
てさめしあかさめても。いほのぶにさる
うらすておあしをまゆらさを人もげ
きすまのへ。わてもまのゆゑあつきげ
まいらん人も思ゆまゝしめ。へうらしいすへ
ごくるゑを字のかけしをうまて

御ばしぬ何はさきさらし。が今更
りそ出かん。人の御らひもくく
あゆしうかん。さらとくうのらふ
うきすまのなどちづこあひそかん心
ぐうしきをいうなきまのし。ぞさけうら
のらぎきをさるべくきうして思う
ましてんかど。ん記よつね御がし
まうけかがら。女子ののかことをされも
くみすさことをさ。ごうちことこれ
いのりども。おさらしさうづきけい
しかど。んのいとさずさはされど。
御りふしあしくそ。いさこみしても。
字のときてらしそやかど忘し
やすみゝそ。招うりす母うるゆんの
ど。けさされ。られり字みせかさうかさ
い。ふづくまも御さらしう御さこし

さはされど。このはんひとつはてとのど
かれらぎく人すもおかべのうしね
ひざみ。をとづれまつ。春をむかへざ
んまうけのおどろも。さ毎くらゆく
てうんがんまくらひのさまはくぶ毎ら
まおびしやりされど。御のけざやうな
らぬあま君らちのんどもこれ。宮
あられをまとけくはつくひの喪ある
おりふしをすぐしまうぬさりも。
これをみうきはんぶしのうへしよ
そいなど。浮さらじにそうくらいうく
きくふくしとうまつり。浮ノ姫君の許
よりもどろづまそいうしぬとすく
て。あま君のうくはまでとふつひゆ白
まさんずあめやうまうすうる身みた
よりに。わかをけのみちびきまつる

かりしとやうろうひまふ。まして
わがきみづくひおどろくはげ浮はうくの
ほそくとらひそくまあまよ出合ずや
色うやとさけるのじやうするうくつくく
大ぬ君は。色よろこびのよにまちかねければ。
色らやつて今ぞん六条院よりつくらぬへ
ろくあれど。くらのはうく中参りまへ
まさん。御の心みてきかずよろこびそよ
しめそて。ゆきてとさしこれこれんこの
ことの内乃すらげよ。いつよりかき
まよろるにかそし月乃うちにいと
くそうろされどもけさあつるを。
うかんとけゆる焦て。おねかくゑ
みそらまつおくのおやまちを拾び
しめしそのめずいうひおうもまし。
されどかりそめのいおいつゆへ

まやしうてとく〳〵やのミ寸部をし
て入なる。い（色詞）とりくからつ縁いま
しめもごとりおそわず。やゝてく
ゆりめかるゝすゝうちいゝひぬる。
つきをすなまめりし。どうらありて。
（中）女いざり物語ふうしきかれば。の方（色）
とりおさい（詞）さいまゝもせさぬる。（色）
終しう出るへすゝすまとりや。京を
くきくへのらふるゝ。らしのかたの
対面もまりゝまするゝ縁りつる
ろう。中く知り姫しくなどやの向へる。
（中詞）ぐるとちぢめりそめるのくりあさふ。
心ばそうとげらりめのうゑまずごとりし
あつる。（色に）さらまりしう知りしげかり。
（詞）若はつりる物のそてをしゝずうたま。
見とりむらやといゝぞかいひそゝる

かれとく。しあやうなよりぬるて。
御乃むりしその御物語りきかやうな
きくしあふうし。うのをのくすまぬる
様なりしあらず。さるいとも又常し
あらをぬべきくのこくすうをうけても
いひ出ずい娘なきくすて。つぶそくら
とおぼさんくうしうれども。ぞすくすり
み一族のありさ母代。お中しさもなの
づらくれすりそめと。しつ涙が
まなてうしあつる。我も又やしすく
わとまづつまなくるくちーしてすや
すゞうきみなくしくそふこされ
とやく出んも。らてすなれくちもど
しゞうちきくおらん人代。うのめり
心づさしとの母子も。あしりばらさ
そしゆましそめて。ものこりかう

こそすゝめ。さのかづらうしよゆかし
くるしきのうらみをもあらはすさうく
いとおしけれど。家の御あくらはすて。錦を
きづらぬひとへしきをり。しとのづ
うち神のうくれあて。れのきくく人
あしがなど。はおもしきふらすうまゝ
みうちのうしみうるを
とげぬ
うるべし

山代七院

---

### 大上天皇

葵の巻より位をゆづりておりゐさせ給ふの巻にかくれ給ふ。桐つぼの御かどなり　はゝ付は桐帝ともあり

### 前坊

秋好中宮　母ハ六条の御息所

故院の御おとうと　葵に見えたり
葵に前坊はうちもおこなはれつゞく
に此へ帰しをお譲位の御はかり
まで。桐つぼもよし女に宮家
まうちづれは皇后家にあらせ
給はゞ付は御受継ともあり

### 桃園式部卿の宮

槿の斎院

うちをおゆるされて見えたり

御もとにうものいつきすみあらす
きこしめし御服ふよりておりさせ
お桃園にあるよ。女五の宮とあひすま

**三の宮** しきぶ わき付に勝とあり
院のひとつ御はらし。桃園の式宮に
おはしますよし此表りく
れすふ わき付に大宮とあり

**女五の宮** 桃園宮にすみ給ふ 朝がほに出

---

**朱雀院**（すざく） わき付朱 母ハ弘徽殿（こきでん）の大后
桐つぼ此表に春宮。葵に御位に
つき給ふ。みをつくしに位を春宮に
ゆづり。若菜上に御ぐしおろして。
西山の御寺にすませ給ふ御むすめ
六条院にかしづかせ給ふ一院と申 此院

**今上** 母 承香殿（せうきやう）の女御
明石の巻に二歳とこそ。みをつくしに
春宮。梅枝に御元服あり。若菜下に
位につき給ふ わき付今上

---

**女一の宮** わかなの上まきにみゆ

**落葉の宮** 母ハ一条の御息所
わかなの下に。柏木右衛門督の北の
方になり給ふ。後に夕霧の大将かた
らひ給ふ

**二品内親王** 母ハ先帝の源氏の女
わかなの上に。六条院にわたりて。
同下に二品になり。柏木衛門の恋
かけまいり わき付に女三

**女四の宮** わかな上にみゆ

---

**春宮** 母ハあかしの中宮
わかなにむまれ給ひて同下に
坊にゐ給ふ

**二の宮** 母ハ春宮に同じ
宿木の巻に。夕霧の中君

ありて、六条院の寝殿をやすみ所
にし給ふ。二の宮と申しけるを式部卿

匂兵部卿の宮　母同上
おなじとしに生れ給ひ。匂宮此君に
げん服して。兵部卿に任ず
やしなひの三の宮也　のちに匂

若君　母宇治の中の君
やどり木の巻に生れ給

常陸の宮　母ハ更衣
匂宮の巻に。夕霧の大将ののりゆみの
かへりあるじにまゐりし也。紅梅の巻
にすみかひをされし人。四の宮とも

中務の宮　母ハ同上
同じくのりゆみの日夕霧大将まね
きよせて。車にのせおはし。此の宮
あづまやに大臣此けるやうの時

あり給ひ。又やどり木の巻に御物見そ
こ給ふにまうでられし人、

七の宮　母ハ同上
これも紫の上やしなひまて六条院
の南の町にすみ給ひて。大将
にくけありし人

女二の宮　母ハ藤つぼの女御
やどり木の巻にて薫
大将をむこにとりたまふ

六条院　母　桐つぼの更衣
七歳にて源の姓をたまはり。十二にてげん
服。十七にて中将。紅葉の賀のかへりに正三
位（中将兼元）同年宰相（中将兼元）葵に大将。
すまの巻に須磨にくだり。明石の
巻に都にかへりて。[illegible]乃
権大納言になり。みをつくしに内大臣。

うすゞるに位そひて。牛車(うしのくるま)のせん
じをかうぶり。しめに先だちぬ。宮の
うへにおくれまゐらせをさへ給ふ

**夕霧左大臣**　母ハ葵上　（いち付済）

ミおづくしに内春宮の昇殿し世に
えぜしてわかきにしてくらゐのぼる。
同その秋陸目ふうりふりのふ。
朱雀院行幸の時位續まゐる。
其つゞくに中将。右ヾりぬるに宰相（兼）
右の程なくに権中納言。そのとしに
右大将。同年に大納言にて右
大将に轉ず。白家の夫に右
大臣（大将兼之）行けに左大臣（辞大将）

**薫右大将**　母ハ朱雀院女三宮

柏木の実子なれども。六条院の
子にえせして。冷泉院の御子と

中将。秋右を中将（年十四）門差に
三位して宰相にする（中将如元）竹河は
中納言やがて本の二月右近し
神に。權大納言にて右大将を兼ず

**紅梅中将**　母ありしのと

三あづまての三月に明石の姫で
生れおわしかはよしよらむて。大将
に位おもるまに六条院へひき
給ふの程なくに春宮へまゐりて。
きびはなやよひにおはし中宮。
白家の東にうつにすまれし家

**右衛門督**　母ハ三条上

若ともに朱雀院御かどのきさきの
ほけくはまてゐらゝ。女宮の勅撰
落葉ときこゆ。匂宮御世のかり
の白出生しく。又すなはちにあるべし。

宿木にて紅葉ニあそはし時中宮
のおつかひにてまうでゝうたよみし
あけまきにかんしけり

**中納言**　母成内侍
六条院家の御方ひとへてやし
たひゐ御るゐ朱雀院の御かた此
そつく同さ蔵日わかれと同く
参りありしかあわれにこゝろ白
玄はしにのりちの大宰の路
とおもしくおはせし人

**右大弁**　母三条上
白家のまへのりち此日出仕
せし人椎かりしにうたへ参り
うちよしこゝろあわれにてゐ
とうり

**侍従宰相**　母これともし

椎かりしに白家のりつたまうて
の時宰相へ参りたりし人

**宰相中将**　母三条上
もとは蔵人の頭竹河は三位の
中将同年よ宰相中将左近
権中将とより文まかりし此
まへ同し頭よくかけりたる上
しかへとよるは人へてや

**頭中将**　母成内侍
竹河は頭中将とそりやそうなき
白家六ッ君にうらひそめのは
文ありし此つらひまてまうらひ
るてとつるし人椎本よ此の
中将とよろこひ人ぬし

**中位中将**　母三条上
一品宮の御やとの時按察使の

りく中宮の御つかひをせし人作
河に玉鬘尚侍の本に参る人

童（わらは）
夕霧続とも
母しれとしかし
やどり木に今上（えんじやう）の女二宮裳着の時笙吹きし人
七郎君といへり

春宮女御　母三条上
匂宮の上のあね君・春宮へ参り給ふ

中君　母典侍
二宮の北のかた

三君　母藤典侍

四君　母三条上

五君　母同し
已上三人夕霧の君の御子也

六君　母藤典侍
やどり木に・匂兵部卿宮に嫁す

---

蛍兵部卿宮
もとは帥宮（そちの）と申し・朱雀院の
行幸の時・兵部卿となる
うせし　紅梅に見えたり

侍従　母しらぬのみ
梅枝に六条院にて・ちく此宮
つかひとて父（父）本より参りし人

童君

同
此二人みな下に朱雀院の御孫に
あらず・右大臣まきばしらの

宮御方（みやのおん）　母まきばしらの上
父うせて後・母君よくして
按察（あぜち）大納言の北のかたとす・
匂兵部卿宮の事すゝむる
きかれし人

四宮　母承香殿女御
紅葉賀まきにハ見えて絵合まきになし

帥宮
常ニ六条院の御遊の折ごとに見えて
あまた巻々ニ見えけれバ兵部卿宮と
同じ人

八宮　母大臣女
宇治にこもりゐまし。橋姫の巻に見えて
うばそくの宮とも申けり　つき付八

総角大君（あげまきのおほいきみ）　母大臣女
あげまきの巻に失せ給ふを　つき付大

中君（なかのきみ）　母おなじ
あげまきに兵部卿宮にあひて。
早蕨ニ二条院へむかへられぬ　つき中

浮舟　母ひたちが今の室
やどり木にひたちよりのぼりて
東屋より手習にいたりうつり見え
夢にいたりてみゆ　つき付浮

式部卿宮
東屋の巻にむすめの事かたる
大将にくはしくへかげ
その後にうせ給ひけん
蜻蛉のまきに見えたり

侍従　母しもの少将

宮の君（みやのきみ）　母同し
父みやうせ給て後。女一の宮
のかたへまゐりおなじうかしつき
かなしみひし人

冷泉院（れいせい）　母ふぢつぼの女院
葵まき東宮とつけたり。竹河に
御位をおりさせ給ふ。御年十八にて
つき付冷

一宮（いちのみや）　母ちじのおとゞのむすめ

生れ給ふ。竹河のまきにみゆ

女一ノ宮　母致仕大臣女

一のみこうちそあね

女二ノ宮　母　一宮に同じ

竹河に生れ給ふ。其て一ノ宮比婚し

一品ノ宮　母朱雀院に同し

女一の宮なり。一品のくらゐに上り

[illegible]

女二ノ宮

[illegible]院

葵にうせものゝけのゆへさら

朱雀院の御かどよりて参り

きさき。女三ノ宮とあり

---

●先帝

式部卿宮

始ハ兵部卿宮と申しき。紫の上の父也

---

薄雲女院　先帝の四の宮也

桐つぼの御門へ参りて。藤つぼと

申。紅葉賀がゞのときまさ女の御子を

女院をうして。桐つぼうちかさ

あまりさ出家し給ひ。そのゝちに

大上天皇に准じ給ふ

かくれ給ふ

源氏の宮　母更衣

朱雀院。春宮の御時よりまゐり

給て女ごをとうらみの宮

やしきうを給ふて給ふ

源中納言

藤袴にみえたる。柏木にうちえ給ふ

よりはじめてせのし人にける

かくて中納言と云

あかきみ　朱雀院の五十の賀の日
皇麞（わうじやう）まいし人

中務

侍従

民部ノ大輔
此三人ハいうきりの宮の大将殿の
里ばなれし時父のゆづりの人
まゐりし人

舞姫　大納言室　母今の北の方
大納言にひきのちきりし人

近江上　母按察大納言の女
十ばかりの時源氏の君をむかへとり給
ふかくかくれ車とゆるされ
のりよろこびける

冷泉院女御　母四の君
しもこの御方におはしまし中宮とは
わかうへ（?）なりける

---

● 常陸宮家
阿闍梨　醍醐の阿闍梨
源氏の君の後に参りてそのよろこ
びとしてよりまして御祈りし人

末摘花　末摘花の兄にて源氏の君
あひ参りて初じての後にかよひ
給ふ　のちに参らせ

● 摂政太政大臣
桐壺の大臣にて源氏の君の紐
冠をし人なり　ゆかりの君の御かた
まかりつくしよりいたりて摂政
しのぶすぢの正月よりそのか
のゝちたまの

致仕太政大臣　母三宮
桐つぼの後人おはしまして中将
紅梅かくの正二位下源氏にまし

中将はおぼつかなし。按察中納言なるを
もとは按察大納言にて。右と左をかね
給ふし。かゝる内大臣。右の大いなる
左政大臣。ゆゑなりし後住の表白
てさけりあふさをあつかし。今まで
其まゝにてぞ　ワキ付ナリ

**右中弁**

按察大納言の子。源氏の御むつびに参り
し人也。の家あとは中将。弁なりまゐり
あひてよろこびもせし人也。ゆかし夕がほ
の君の哀れの弁もせし人なりや

**故大納言**
**まろが大史**

此二人は源氏三条の宮へはやりな
し時。後住のおきて。ひきつれて参り
給ひしも。かうかうのこと也とあり。

しかるに左衛門督。按察中納言とやら
なりけんでの事にや。さらうたで
五節（せち）なりしたま給ふ。下

**葵上**　母三宮

あふひの君は。夕霧大臣をうみ
給ひてうせ給ふ

**柏木権大納言**　母二条右大臣女四君

しかるに右をかね。こそふに右をも中ね。
うらめるに中ね。すゝきより宰相
右衛門督。同じく按察中納言。権大
先にうすのかの按察大納言なり
ありて。かゞくに主をかふ

**紅梅の大臣**　母同上

さらにまかりすて。鎌かきりまし
けるの由。なきかなしく
おぼつかなえ候。されあに答かね。

こゝのつぎに弁。おなじ下にた
大弁。柏木に大納言ならびなし
時。一条の家みちなくもとめし人
ず出て冷泉院へまゐりしもけ人
なるべし。紅梅に按察大納言と
見ゆ。竹河に右大臣左大将
けるを右大臣になりおとゞといふ。又
椎が本に匂宮の御かたをまもりて
のゆかりにて参りし按大納言も
この人なるべし。やどり木あづまや
みゆるにて。按察大納言といふ不義

**女子**

まゝりうとの君のふたりの人
紅梅に忘れずてまゐらせ
蛍兵部卿宮ノ母。北の方
紅梅母にまうで来へまゐるなり

**中の君**　母同じ

---

**右衛門督**　竹河に蔵人督とある
はこの人なるべし

**蔵宰相**

あげまきにてものまうけのくさぐさし
人はこの人。夕霧のおとゞの此君は
なかの君のうちにそのし。第三郎
さうぶしくて。まづ出て六条院
まゐりて。冷泉院にまゐりし
もげんなりや

**頭中将**

**蔵人かね**

は二人御の君に夕霧の君たち
わいまかしーのつけ時。あひぐし
うりしくぞそちの君だちとなり。
又夕霧大将。一条の宮にかよひのあと
まいて。このかねをつかひて。又

初じ。弁といひしめしとさく
とのゝさき。いつとし女まめ納言
衛門佐。中将大夫となりしも。
こゝろにまりの時。左兵衛大夫
といへるもいたくめでし

八郎君　まさりげらに。踏歌の時
わらはにてうたひし人。万の秘歌の行
幸に。賀王恩（くわうおん）まひし。ひげ黒

玉鬘の尚侍　母夕がほのうへ
父の年ごろはゝのうへのめされに
ぐしてつくしへくだり。年へて玉
鬘の君と京へのぼり。後にひげ黒
の大将に。まさき。相まに。ひげくろの北方
となりぬ

弘徽殿女御　母は柏木に同じ
おとくしに十二歳にて内へ参る

夕霧の大臣室　母は按察大納言の今の北方
くもゐのかりとはすさひし人（つまは夕霧）

近江の君　母しれず。いやしき人

二条太政大臣　（のち右大臣）
朱雀院の御母后の親父なり。はじめに
右大臣。のちに太政大臣にまで至
るよしといふ

藤大納言

頭弁　後まに白虹日をつらぬ
けると誦せし人

承香殿女御　朱雀院御ての
の時の女御。今上の御母

宣信が娘　父おとゞ嫁のゑんじ
おわり。源氏の御むすめにて
てなさるべての女すつけ
し人

右中弁　此二人ハ源氏おぼろ月
夜のもりまゐりしてかの縁
の車に人をつけてこゝをおしとき。
弘徽殿よりおほくの沙をとりせ
しくらしめけるのをさる中納
言のすけとぢいつるもじくるや
弘徽殿大后　前は弘徽殿女御又大后
朱雀院の御母あるひは皇太后
うをおめるよしおなよくに人西
常陸宮の少君　花のえんの春によきめ
右大臣家　四君とゆのしき
五君　花のえんまでよりて
朧月夜尚侍　前は朧月
あるひは朱雀院に参りてミく
げどとやゆ。御方は御停でおる
ふにゐるよすり。むか六の春とより

● 右大臣　みゆきより梅壺よりてら
てのおとゞとのくるまで
女御　冷泉院御位の御代女御梅壺より　三や
● 右大臣　梅壺より右大臣となる上のもけ國
大納言
修理大夫　此二人兼ひてつけ給わるお源
承香殿女御　今上東宮の御時より参
り。かの夕霧の中宮あるまじきされおき。
女二宮かくりなされるとすりかをかはし
やどりきてをへぢり又梅つぼ
藤壺殿とゆゝし　三君は今や
● 左大臣　竹川左大臣とまうす
女　夕霧の北の方。雲井の雁。
くら人のかねとゆゝし　時おりそ
めましき
○ 右大臣　今上の御祖父。明石の太夫殿とこそ

鬚黒太政大臣

こちらは大臣つかさなりしかはたは
鬚黒同下は大臣まで太政殿を
継す。新高の院うしろみをかは
太政大臣をあはし竹河う
へより 竹川ひげくろ

紅の中納言 源氏のおとゝとゆかしの時。内侍
のつかさより出て それとも
のりとうちあそひしなりし人

承香殿女御 朱雀院の女御 今上の
御母なり。まつろはつるの下にゝめ

蔵人少将 母ハ雲居の雁 女

竹河には十ばかりにあまたよしの
とあり。竹河の三月にまた母の
御前のりとへまうでたりし人を
つまにしてあの宮のおもかけをしのびしぬ

---

次郎君 母同じ

竹河は八ツくらゐまでなりけれど
そのうちべきことの人々のつく
其後昇進かなはず

左兵衛督 母おなじ

右大臣に母君のにおもひぬ代の常に
かふ文朱雀院の御かたの日。陵王まひ
ひし人竹河にたちまちしたひ黒衆
におなじまつる。かしこまれる
といひしにおもはるに宮のうへの日。
御すゝきしひちまつしけ人あまし

右中弁 母同じ

此二人の兄弟は冷泉院にまいりて
まいりしに のぐして参りかの文字院
院の御かたみのくの日。同じ君の目
にまいりあり。竹河に右中弁。

同し巻にて大いぎみ

左の中将 母おなし

竹川の巻にて。同巻にては中将

真木柱の上 中納言の同

わかきに宮のきたの方の御方に

まいらせて後。紅梅大臣。按

察大納言と申し時。北方になし

おはする 柱は舞をもすなど。られ

給ふ人

女御

母玉かつらの内侍

竹川の巻にて冷泉院へまいりたまふ。

夕霧の御子。宰相中将。蔵人少将なと

とのゝしけ。ふらしまへ人

（ないしのかみ）尚侍 母女御と同し

竹川にて母のゆづりをうけて内侍に

ありやけん内へまいりたまふ

---

●大臣

六条の御息所 十六にて東宮へ参り

給。（あきこのむの）秋好中宮をうめり。二十九にて

さらにわかれ給。卅あまりにてむすめの

（さい）斎宮にそひて伊勢にくだり

三年すきて京にかへりて。かくれ給ふ

ます ワき付御息所

●大臣 ―― 歳 宇治の八宮の北

ひめ君二人うまれてなくなりたまへは

なくなりたまふ

●大臣

宇治宮の北の方 これ九月にてず

常陸の宮の御方 ワき付浮舟ノ母

宇治宮の北の方のめのいとこ中将の君と

てありけるがあり。常陸のかみのちの北方になりて

後にてまかりひのとゝなり給ふよひ

きはにくて すゑわかれまつりき

十六代

**入道播磨守**
近衛中将なりけるが
辞して播磨守になりその國に
てかしらおろしさりとらんゆ
ところ〳〵に情源氏をさそひて源氏
むかへぬ

**明石上** 母ハ中務親王のむすめご
松風よりの源氏をかよはれて住
まゐらしかし 女は六条院に
ひらて。あかしの中宮となる

**按察大納言**
その子侍従律師
源氏の君のやまひをきとうす（かきりん）文かずし中也
かくすり。ゆうあまる人也
**桐壺更衣** 源氏の君をうみ給て。三
とせといふにうせ給ひぬるが

こそですかそで作る時。琴箏（てうさう）をゆるさる。
名近がすゝめによつて三位をさづくる

● **按察大納言ノ北の方ノ母**

● **按察大納言の弁ノ君**
しかるにまちがすかして。やがれさある
ひきがゝりのむすめとあり

● **大輔** 東屋の巻大輔とあり
右近が母 ひたちのすけがむすこ

● **按中納言子** 右衛門督なりけるとぞ
**大夫の侍従** 源氏中川のかたたがへの時。
りかおくまりかぶるらいりをと
のかきふみで ひたちへぞらせ
きやよのがつまの君をさとし
**蛍君** 父ハ兵部卿宮にて後いまは
まけがつまよする文ひくへにまうで
くぶしみがしてくらりせさやま

宮へのぼりく。同車にすけまと
くれぐく後。局にかりて。二条院の
ひんがしのたいにすまゐ

●右衛門督ノ女　母そのゝ局
中将すゞ人の方にてはじめ[illegible]
●冬殿家内にてし明石乳母　母院の宣旨
源氏のきみにゆかりて明石へくだりし也。
[illegible]のひめぎみのかゝりぬ

三位中将
夕霧ノ上　雲居の雁とも。蔵人少将
とゆうしにかよひて。あひごとを
うめり。[illegible]のやどりにて。
源氏よあひするがしの院とや
まくどのにかくれてうせ給へ年
十九

宰相ノ宰相君　あゆみつゝの女房

六条院にすまゐしに人ぞ此
ききし人付けらるにおよめ
うけしものくまで

孝継惟光　母大弐乳母
りぞめに殿入お勝とまりしおよ
はゞかりて。お東方へかけり。

兵衛尉（ひやうゑのぜう）
梅ぐしは宰相
童（わらは）かく[illegible]をゆるされ。
いるとのおぼえよう[illegible]の文
つかひしつひとかう。梅
くしは[illegible]みなもとよう
まれしきかりて[illegible]人

家典侍（ないしのすけ）
[illegible]の宰相のぎりの
おぼれひとびとに[illegible]
とゝ

山阿闍梨　惟光があにと夕顔にそひ

かの倉娘　夕がほのまへまつる命
三河守ノ妻（つま）　夕がほに右近のあねの
さやうはありき

●前播磨守
源ノ良清（よしきよ）　若紫に。蔵人にてう
うちおはしゝにおかゆるとよみ。
みちづくるに靭負佐（ゆげいノすけ）をとゞめ
右中弁までとなりて守を兼（かね）す
五節　少女のまきにゆよなりし
に。おやどれさふらふよしあるゝ

●左中弁
宇治ノ宮少将母にてみえたりと
いふ
弁ノ尼　母ハ柏木のめのと
女三宮の侍従のめのとのめゐ。
かほる大将に昔の事申をし
人。あまとなりてありしさはいなる

●伊予ノ介　のちハ伊予守よりひたち
のすけとなりてやよのかへる関屋にあはせ
紀伊守（きのかみ）　源氏かたゝがへの中川の家
あるじ。をさやに河内守（かはちのかみ）になる。蔵
あるとけるゝがにみゆる也
蔵人右近将監　源氏の大将にて斎（さい）院
の御禊（ごけい）につかうまつりし時。
一員（らうのん）きてうしくまうち。大将須磨
の浦にともしき。おりがぬゐ
ゆるされてのちのぼりて。
ゆげいのぞうになる。松風まきに
かうぶりき
蔵人少将ノ妻（つま）　空蝉のまゝむすめ。
源氏うつせみのもぬけのからあひ
まて。軒端の荻をしらずして
よこてつらしき人

**常陸介**

さきはみちのくにのかミ
のちはひたちのすけ

**蔵人式部丞**（ぜう）　母まへのつま
おやの所よりのゆづりにて宮家
へまゐりし人

**蔵人右近将監**　母いまのつま
かをる君むかしのゆかりとおぼし
て蔵人よりて右近の将監になる

**童**（わらは）　母おなじ
かをるそうづのよかはにきこえてかをるの
文をもてつかはされし人

**源少納言妻**　母まへのつま

**讃岐守妻**　母同じ

**左近ノ少将**　母今のつま
[illegible]

---

**太宰大弐**

源氏すまにおはしましゝ
ころつくしよりのぼるとておと
づれまゐりし人

**筑前守**　父のつかひにてすまへ参りし人

**五節**　源氏おもひをかけし人[illegible]
[illegible]

**大宰少弐**

**豊後介**　玉鬘の上の乳母の男
父うせては玉かづらの
君をぐしてのぼり六条院へつか
うまつりそのゝち家司（けいし）にくはゝる

**次郎**
のぼらず

**三郎**　はじめはつくしにめまうけて京へ

**揚名介妻**　夕がほの[illegible]

姉（あね）お柳しう　られもつくしふあり
つきてのがゝす
喜ノ君　もつあてどといひさ。
しめぢんにてのがりめ、
●喜ノ太郎　わんぱくといふ
太郎令婦　母太衛門のあつと
すゑつむみ。兵のり源田より
きらせし人